

統合医療で がんに克つ

特集 **がんの血管内治療**

がんと血管内治療

—免疫活性化血管内治療

大井博道 CSクリニック院長

骨盤内がん（子宮頸がん、直腸がんなど）に対する 閉鎖循環下抗がん剤灌流療法

監修 村田 智 日本医科大学放射線医学准教授

膵臓がんに対する動注化学+温熱併用療法

監修 三浦 健 三浦病院院長

IVRの重大な一翼である腹腔-静脈シャント術

監修 島村善行 島村トータル・ケア・クリニック院長

特別企画

「ホメオパシー」についての日本学術会議会長談話
「日本学術会議会長談話」に対する日本ホメオパシー医学協会の見解

シリーズ

医療の現場から 三番町ごきげんクリニック
澤登雅一院長に訊く
標準治療・抗加齢医学の知識を生かし、「あきらめない医療」を展開



京都・今出川 相国寺



「ホメオパシー」 についての 日本学術会議会長談話

19世紀にドイツ人医師サミュエル・ハーネマンによって創始された「ホメオパシー」。欧州、インド、中南米諸国で広く用いられ、日本でも近年注目されつつある。しかし去る8月、ホメオパシーによる「療法」には「科学的根拠がない」として日本学術会議会長・金澤一郎氏より「警告」が発せられ、『朝日新聞』などでもその「有効性」の問題などが取り上げられた。この会長談話と、日本ホメオパシー医学協会（JPHMA）の「見解」を以下にご紹介する。

ホメオパシーはドイツ人医師ハーネマン（1755-1843年）が始めたもので、レメディー（治療薬）と呼ばれる「ある種の水」を含ませた砂糖玉があらゆる病気を治療できると称するものです。近代的な医薬品や安全な外科手術が開発される以前の、民間医療や伝統医療しかなかった時代に欧米各国において「副作用がない治療法」として広がったのですが、米国では1910年のフレクスナー報告に基づいて黎明期にあった西欧医学を基本に据え、科学的な事実を重視する医療改革を行う中で医学教育からホメオパシーを排除し、現在の質の高い医療が実現しました。

こうした過去の歴史を知ってか知らずか、最近の日本ではこれまでほとんど表に出ることがなかったホメオパシーが医療関係者の間で急速に広がり、ホメオパシー施療者養成学校までできています。このことに対しては強い戸惑いを感じざるを得ません。

その理由は「科学の無視」です。レメディーとは、植物、動物組織、鉱物などを水で100倍希釈して振盪する作業を10数回から30回程度繰り返して作った水を、砂糖玉に浸み込ませたものです。希釈操作を30回繰り返した場合、もともと存在した物質の濃度は10の60乗倍希釈されることになります。こんな極端な希釈を行えば、水の中に元の物質が含まれないことは誰もが理解できることです。「ただの水」ですから「副作用がない」ことはもちろんですが、治療効果もあるはずがありません。

物質が存在しないのに治療効果があると称することの矛盾に対しては、「水が、かつて物質が存在したという記憶を持つているため」と説明しています。当然ながらこの主張には科学的な根拠がなく、荒唐無稽としか言いようがありません。

過去には「ホメオパシーに治療効果がある」と主張する論文が出されたことがありますが。しかし、その後の検証によりこれらの論文は誤りで、その効果はプラセボ（偽薬）と同じ、すなわち心理的な効果であり、治療としての有効性がないことが科学的に証明されています¹。英国下院科学技術委員会

も同様に徹底した検証の結果ホメオパシーの治療効果を否定しています²。

「幼児や動物にも効くのだからプラセボではない」という主張もありますが、効果を判定するのは人間であり、「効くはずだ」という先入観が判断を誤らせてプラセボ効果を生み出します。

「プラセボであっても効くのだから治療になる」とも主張されていますが、ホメオパシーに頼ることによって、確実に有効な治療を受ける機会を逸する可能性があることが大きな問題であり、時には命にかかわる事態も起こりかねません³。こうした理由で、例えばプラセボとしても、医療関係者がホメオパシーを治療に使用することは認められません。

ホメオパシーは現在もヨーロッパを始め多くの国に広がっています。これらの国ではホメオパシーが非科学的であることを知りつつ、多くの人が信じているために、直ちにこれを医療現場から排除し、あるいは医療保険の適用を解除することが困難な状況にあります⁴。またホメオパシーを一旦排除した米国でも、自然回帰志向の中で再びこれを信じる人が増えているようです。

日本ではホメオパシーを信じる人はそれほど多くないのですが、今のうちに医療・歯科医療・獣医療現場からこれを排除する努力が行われなければ「自然に近い安全で有効な治療」という誤解が広がり、欧米と同様の深刻な事態に陥ることが懸念されます。そしてすべての関係者はホメオパシーの

ような非科学を排除して正しい科学を広める役割を果たさなくてはなりません。

最後にもう一度申し上げますが、ホメオパシーの治療効果は科学的に明確に否定されています。それを「効果がある」と称して治療に使用することは厳に慎むべき行為です。このことを多くの方にぜひご理解いただきたいと思えます⁵。

平成22年8月24日
日本学術会議会長
金澤 一郎

1 Shang A et al. Are the clinical effects of homeopathy placebo effects? Comparative study of placebo-controlled trials of homeopathy and allopathy. Lancet 2005; 366: 726

2 Evidence Check 2: Homeopathy 2010. <http://www.publications.parliament.uk/pa/cm200910/cmselect/cmselect/45/45.pdf>

3 ビタミンKの代わりにレメディーを与えられた生後2ヶ月の女児が昨年10月に死亡し、これを投与した助産婦を母親が提訴したことが本年7月に報道されました。

4 WHOは世界の一部の国でホメオパシーが広く使用されている現実に対応して、その治療効果には言及せずに、安全性の問題だけについての注意喚起を行っています。
<http://www.who.int/medicines/areas/traditional/prehomeopathic/en/index.html>

5 ホメオパシーについて十分に理解した上で、自身のために使用することは個人の自由です。

ホメオパシーの “エビデンス”

「日本学術会議会長談話」に対する

日本ホメオパシー医学協会(JPHMA)の見解

ホメオパシーの有効性は 200年の歴史の中で十分に証明されている

由井寅子 日本ホメオパシー医学協会(JPHMA)会長

はじめに

私は、潰瘍性大腸炎を患い「人工肛門にするしかない」という状況の中でホメオパシーと出会い、治癒するという経験をしました。同時に、心のこだわりから解放され、身も心も生まれ変わったような体験をし、一念発起して5年間英国で勉強し、ホメオパス(ホメオパシー療法家)となり、16年前に日本にホメオパシーを導入しました。

1998年に設立されたJPHMA(2010年9月現在、会員数1005名)は、世界28カ国からなるホメオパシー国際評

議会(以下、ICH)の正式メンバーであり、ICHのガイドラインに基づき、ホメオパス職業保険の下、560人のJPHMA認定ホメオパスがいて、全国250カ所の日本ホメオパシーセンターでホメオパシー健康相談を行っています。

日本学術の最高権威である日本学術会議は8月24日に発表した声で、ホメオパシーについて「治療効果なし」、「科学的根拠がなく荒唐無稽」、「ただの水」、「医療関係者がホメオパシーを治療に使うことは認められません」と断定し、翌日には、日本医師会など医療関係の9団体がこの

声名に対する全面的な支持を表明しました。

しかしホメオパシーの有効性は200年の歴史の中で十分に証明されているだけでなく、二重盲検法による検査をはじめ有効性を示す研究論文も相当な数にのぼり、何百件もの臨床研究ほか、生物活性を検証した相当数の基礎科学研究もあります。たった1つのホメオパシーの有効性を否定する論文、しかもホメオパシーと関係のない権威から欠陥論文と指摘されている論文を持ち出してホメオパシーを全面否定したことは、軽率だったのではないのでしょうか。

私どもは、日本学術会議を非難するつもりはありません。ただ日本学術会議をはじめホメオパシーに懐疑的な皆様、ホメオパシーの公正な調査と私どもがプロのホメオパスとしてホメオパシー療法を行うなかで、難治性の病気が改善や治癒した非常に多くの症例があることを知っていたきたいし、実際にその症例を見て判断していただきたいと心から願っています。

事実とかけ離れた報道が 1人歩きしている

日本学術会議の報道資料でも「ビタミンKの代わりにレメディ

1を与えられた生後2カ月の女兒が昨年(2009年)10月に死亡し、これを投与した助産婦を母親が提訴したことが本年7月に報道されました」と紹介されています。しかし本ケースで、ホメオパシー利用者であった原告は、ホメオパスの被告(JPHMA会員)に対してレメディを与えたことを問題にしているのではなく、ビタミンKの不足で死亡したと思われることに對して助産師の業務上の責任を問うているのです。

これに対して助産師は、第1回目の弁論で訴状の内容を認めず請求の棄却を求めています。そして助産師は「ビタミンKの代わりにレメディを」とは言っておらず、その上、死因とビタミンK不足の因果関係も確定されていない状況です。本ケースは、ある報道機関が訴状内容を十分に確認せず、また助産師の言ったことを歪曲して報道したことに端を発します。その後はおそらく、この報道機関が書いたことの裏付けもとらず事実関係を十分に調査することなく、他の報道機関も追従し、正しくない情報をそのまま流用し報道

するという連鎖の中で、あたかもそれが既成事実であるかのようになっていったと考えます。こうして、無実の人が、有罪になつてしまうこともあるのだというのを今回の一連の報道を通して思い知りました。JPHMAとしては、裁判中であるため、本件に関しては当初よりコメントを差し控えてきましたが、あまりに事実とかけ離れた報道が1人歩きしている状況を憂い、ここに争点以外の部分で真相の一部を公表することにしました。

もうひとつ、新聞各紙で取り上げられたJPHMA会員の療法家が対応した悪性リンパ腫のケースにしても、亡くなられた方自身が薬の副作用に苦しんだ経験から頑なに病院に行くことを拒んでいたということですが、この療法家は現代医療を否定しておらず、当然「病院に行くな」とも「ホメオパシーで必ず治る」などとも一言も言っていない。しかし、なぜかその反対のことが報道され続け、さらに中心的な治療はホメオパシーだけではなかったにもかかわらずホメオパシーやJPHMA会員による医療ネグレストが原因であるかの

ように報道され続けました。

各報道機関はこの2つのケースをとりあげ、あたかもホメオパスで人が死に、ホメオパスは現代医学を否定していると決めつけ、多数の被害者が出ているかのように記事を書き、挙句の果てには「カルト」呼ばわりし、過剰反応ともいえる報道を続けました。200年以上も続いている世界の代表的な代替療法で最も安全なホメオパシーがこのように扱われてしまったのは、報道機関が事実をしつかり調査せず、またホメオパシーをしつかり調査せずに報道した結果です。

JPHMAとしてはホメオパシーの名誉と、会員の人権を守るため、さらに日本のホメオパシーの利用者15万人のため、そして、ホメオパシーを誤解してしまった多くの国民の皆様にも事実を知ってもらうために、ホームページ上でホメオパシー新聞を発行しています。今後も事実の相違があれば、発行していきます。ただしホメオパシーが原因でないとしても、人が亡くなったことは重大なことであり、お亡くなりになられた方々に心か

らお悔やみを申し上げたいと思います。そして会員にも反省すべきところは、反省を求めると同時に全会員に今1度、現代医療を否定的に考えないよう周知徹底を図るとともにホメオパシー利用者が、ホメオパシーを愛好するあまり、現代医療を頑なに拒否することがないよう、当協会や普及団体を通して発信していきたいと考えます。

ホメオパシーとは

ホメオパシー(同種療法)は、今から200年前に、ドイツ人医師サミュエル・ハーネマンにより体系化された療法です。原物質がまったく存在しないレベルまで高度に希釈振盪されたレメディ(原物質の情報は残っている)を用いて自己治癒力を触発し、自ら健康になつていく療法です。原物質はないので薬物療法のような副作用もなく、最も安全な代替療法とも言われています。赤ん坊や妊婦も安心して使え、また急性、慢性症状、心の問題など幅広く対処できるため、世界で10億人以上が親しんでいる国際的にも広く普及した療法です。ヒポクラテスが「何



世界のホメオパシー

2004年ブリストルホメオパシー病院の患者 6000 名中
5 大疾患 (1500 人) の調査結果
レメディー使用後の改善率

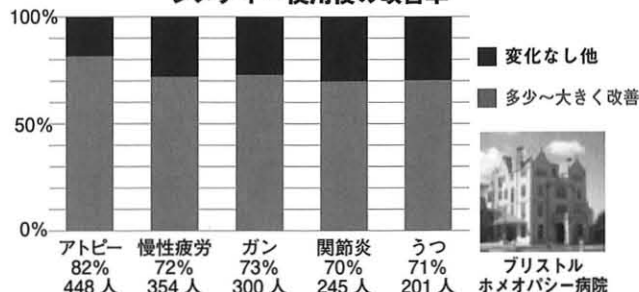


図1 ブリストルホメオパシー病院での5大疾患におけるレメディー使用後の治癒率

©Dr.Torako Yui&CHhom.RAH

誰がホメオパシーを 行うべきか

一部の医師ホメオパスが、ホメオパシーは医師などの医療従事者が行うべきであると主張していますが、JPHMAは《現代医学を業とする医師であるなしを問わず、ホメオパシー専門教育課程を修了し試験に合格した者が、ホメオパスとして活動をしていることができる》としています。ホメオパ

よりも害をなすなかれ」と述べているように、リスクを伴う医療手段をとる前に、まずはより安全性の高い治療法を利用してほしいと思っています。

JPHMAは現代医学を否定するものではなく、会員倫理規程でも、

《本協会認定ホメオパスは、患者が病院での検査、診察等（以下、検診という）を受けることに否定的であってはならない。病院での検診が必要と判断される場合は、速やかにその旨を患者に伝えなければならぬ。なお、検診を受けるか否かの最終判断は、

あくまでも患者が行うものであり、本協会認定ホメオパスが強制することはあつてはならない。ただし、慢性疾患の患者に対しては、病院での定期的な検診を勧めることが望ましい》

と定めており、実際、重病患者さんのほとんどは現代医学とホメオパシーを併用しています。JPHMAは、ホメオパスが患者さんの望む現代医学の診断、治療、検査、薬物治療などを受けることを妨げてはならないことを繰り返し教育しています。

シーを勉強した者がホメオパシー療法家としてその業を行うことができることは、憲法でも保証されています。

もちろん、ホメオパシーを勉強し、患者さんの体と心の機能や働きを学ぶことがプロのホメオパシー療法家となる条件であると考えます。ゆえに、ホメオパシー専門校のカレッジ・オブ・ホリスティック・ホメオパシー（以下、CHhom）では、4年間かけてホメオパシーの学びを主として、サイコセラピストから心の教育、そして、医学博士から解剖、生理、病理学を学びます。このようにしてCHhomでは、4年間で1600単位時間以上、短大なみの授業時間を学んでいます。

病人を扱う場合、医療の判断がもちろん必要です。だからこそJPHMAは医師、病院と提携し、診断をしてもらい、その上で、患者さんがホメオパシーを使う、またはホメオパシーと現代医療の両方を使う、または、鍼灸を使う、と患者さんが決めていけばよいと考えるのです。もちろん緊急であるならば、すぐに病院に行かねばならないことは当

然のことです。

ただし、薬や予防接種には副作用もあることは、皆様も周知のことと思います。万一、薬や予防接種の副作用で自閉症や医療病になった場合でも、ホメオパシーには改善に導くツールがあります。どこにも行くところがない発達障害の子供を持つ多くの親ごさんの苦しみを見てきた私たちホメオパスは、どうしても自閉症やアスペルガー、多数の子供たちが自らの力で治っていくかを長年かけて研究し、今日、その努力が実り、ホメオパシーを使って自閉症など難治の病気の改善や治癒率は画期的に上がっていったのです。

JPHMAとICHジョ イントホメオパシー国際 カンファレンスのお誘い

「百聞は一見にしかず」。物事をこうだと決定する前に、まずは見てから、そして試してからにしたいのだと思います。

来年2011年10月8日～10日には、日本のつくば国際会議場で、ICH・JPHMAジョイントによる世界初の第1回ICH・JPHMAホメオパシー国

自閉症・多動等、発達障害児 82 名のケース：89%が改善

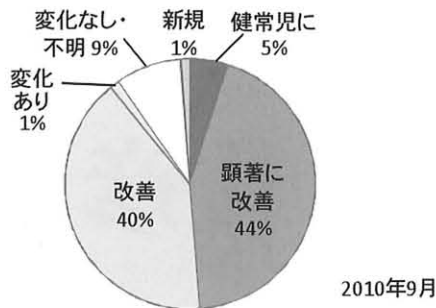
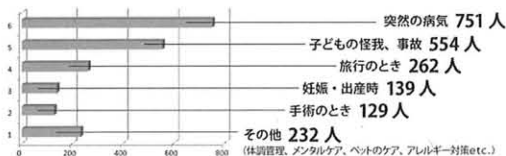


図2 由井の発達障害児 82 名のクライアントにおけるホメオパシー治療を受けた改善結果

©Dr.Torako Yui&CHhom.RAH

●ホメオパシー家庭用キットはどんな場合に役立ちましたか？（複数回答可）



●ホメオパシー相談会を受けての最初の主訴

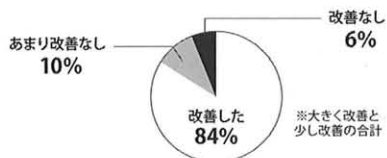


図3 2008 年 JPHMA ホメオパシー利用者に関するアンケート調査 有効回答数 1142 人（一部紹介）。これら以外のホメオパシーの有効性については、JPHMA のホームページをご覧ください。http://www.jphma.org

©Japanese Homoeopathic Medical Association(JPHMA)

際カンファレンスの開催が決定しています。国境や主張の違い、流派を超えて、世界のホメオパシーが日本で1つになります。

この国際カンファレンスには、海外数十カ国から多くのホメオパシー関係者が参加する予定で、世界の国々でのホメオパシーで治療したケースや学術成果が公開され、各国でのホメオパシーの現状と課題についても討議される大会になる予定です。もちろん、日本におけるホメオパシーでの、現代病などへの対処法についても数多く発表される予定です。皆様には、ぜひお越しいただき、ホメオパシーの可能性、治療したケースなどを見て

いただきたいと思っています。

世界大会を来年に控え、2010年9月末には、2日間にわたり「第11回日本ホメオパシー医学協会学術大会」を行い、私は、「自閉・多動の発達障害児、水頭症、癲癇^{てんかん}児の改善と治療例」や「心の問題と関連した子宮筋腫や顔面麻痺、甲状腺がんの治療例」を発表しました。日本における現代のさまざまな問題を考慮した手法（3次元メソッド）の必要性、また、現代医学、他の療法と連携することの重要性について述べました。そしてさらに、14名の認定ホメオパスによる「化学物質過敏症」や「医原病からくる皮膚湿疹」、「帯状疱疹」、「潰

瘍性大腸炎」、「花粉症」、「リウマチ」、「インナーチャイルドによる親子の問題」、「親の影響が子どもに引き継がれた症例」など、ホメオパシーで治療した症例発表が行われました。

今大会の記念講演では、池川クリニック院長・池川明氏による「お産が変われば日本の未来が変わる」、NPO法人IHMA代表・野口哲英氏による「我が国医療、介護における統合医療の役割と将来」、セントマーガレット病院の酒向医師による「千島学説は統合医療に通じる」ホメオパシー統合医療の可能性」を、血液循環療法学院学長の大杉幸毅氏による「自然治療力を

高める血液循環療法」ホメオパシーとの連携と可能性」についての講演が行われ、ホメオパシーを併用することによる療法の期待が高まりました。

さらに今大会は、ICHグウィネス・エバンス会長とステイブン・ゴードン書記官が来日し、日本におけるホメオパシーの現状に対して、「ホメオパシーの歴史が長い国では必ず批判に曝されてきた。そしてホメオパシーは、それを乗り越え発展してきた」と言及されました。そして、日本のホメオパシーの活動状況とホメオパシーで難治の病気が治療している症例発表に関して、日本におけるホメオパスの技術の高さとダイナミズムを賞賛する感想をいただきました。来年つくばで会いましょう。

■『統合医療でがんを克つ』編集部は、ホメオパシー医学協会を支持するという立場で、本「見解」を掲載したものではありません。本問題に関しては、あくまでも中立的な立場とさせていただきます。